

江戸時代の消防事情④

元東京消防庁

消防博物館長 白井和雄

○ 加賀藩自慢の加賀火消

1 加賀火消とは

加賀火消とは、加賀藩主前田綱紀によって、本郷5丁目の上邸内に設けられた、私設の消防組織のことである。

前田綱紀公は、藩校を興し、古書の復刻、外国書籍の買入れなど、文教に大いに意を用いた他、防火にも力を注いだ人物であった。

加賀藩主前田綱紀が天和元年(1681)、本郷5丁目の上邸内(現東京大学の敷地内)に、消防組織を設けた。これが世にいう「加賀火消」といわれるもので、別名「加賀鳶」「喧嘩鳶」とも呼ばれていた。

その出で立ちとは、他の火消(大名火消・定火消・町火消)に類を見ないほど、華々しいものであったと伝えられている。

火事装束は、背中に大きく雲を染め抜き、それに稲妻を交錯させた、派手な「長神纏」を着用していた。

髪は、「粋だ」「勇み肌だ」「俠気だ」という言葉が当て嵌まる、鰻の背のように尖った「鰻背銀杏」と呼ばれた「髪結型」をしていた。

歩き方は左足と左手、右足と右手を揃えて歩く、一風変わったロボットのような歩き方で、「伊達歩き」と呼ばれていた。

火の見櫓の板木の音を合図に、将軍の学問所で

ある「湯島聖堂」の外、他の大名火消と同じように、親戚および菩提寺の火災などに出場した。

加賀火消は前記のように、際立った火消であったことから、錦絵や歌舞伎の素材にもなっている。

2 加賀火消の成り立ち

加賀火消の誕生は前に記したように、天和元年(1681)前田綱紀が本郷5丁目の本邸内に設けた、火消組織がその始まりである。

その後宝永5年(1708)、5代藩主綱紀が駒込の中屋敷に、6代・1主吉徳が本郷の上屋敷に住むようになった際、両屋敷の火災防御のため、改めて5隊の防火隊を組織した。

このうち第1隊と第2隊を本郷の上屋敷に、第3隊と第4隊を駒込の中屋敷に配置し、残りの1隊は予備隊として本郷に置き、それぞれの藩主が指揮をとった。加賀火消の確立である。

当初の組織は総勢96人で、纏持ち4人、ねずみ色の革羽織を着用した小頭4人、茶色の革羽織を着用した鳶は1手(1個隊)20人余であった。

初めは3手と予備の1手で、小頭4人は上・中屋敷で2人ずつ配置され、頭は黒坂左兵衛景永、村半藏愛清など500石級の組頭が当てられていた。

また「御近火火消」と呼ばれた組織として、上屋敷に8人、中屋敷に6人置いていた。

3 藩邸の火の見櫓

江戸藩邸での火の見櫓は、本郷上屋敷の北側に1か所設けられていたが、享保3年(1718)には更に、上屋敷の南門周辺に火の見櫓を増設した。

4 加賀火消の伊達姿

加賀火消の伊達姿について、明治32年(1899)に発刊された『風俗画報臨時増刊・江戸乃華上編』には、次のように記されている。

「加賀中將は其高百二萬二千七百石にして、加かみやしき州金澤の城主たり。江戸本郷五丁目に本邸を構へて消防夫を抱へて以て本邸八丁四方の火災に備へらる。

其扮装他に比類なし。組に一番手、二番手、三番手の三種あり。火の見櫓版木の合圖によりて、親戚・菩提院へ繰出すこと他家に同じ。外に將軍家學問所なる聖堂の火災に勤む。

之に將たるものは騎馬二隊を指揮し、鍾頭巾、火事羽織に赤地へ一寸(3センチ)許りの金角縫ぎ

の胸當を輝かし、馬脇青侍二人づゝ左右に随ひ、鳶は頭目代、小頭役四人づゝ大形の雲に、稻妻染出せる長衿纏を着し。鼠色皮羽織は背に丸の中に斧を打違たる紋を白く現はし、同じ色の股引に鯨金白紐の脚絆青縞の足袋に足踏固め、鼠色の頭巾鐵磋筋金の手鍵を左右に振り携へ。

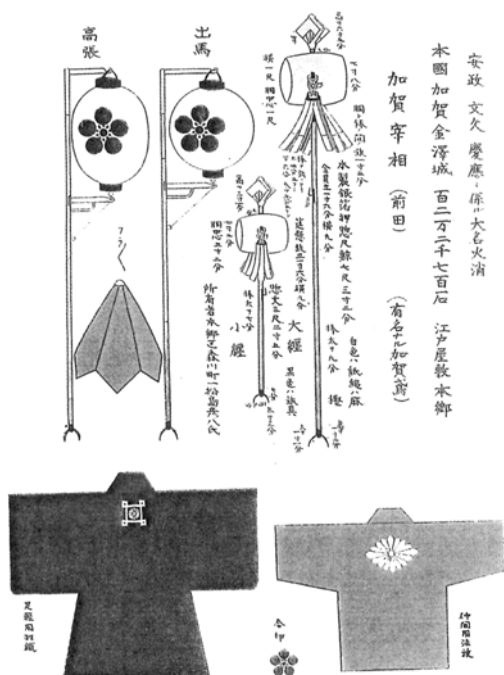
纏持ちも同じ扮装にて、其纏は銀塗太鼓の形にて、胴の左右に力紙を垂れ、之を打振る時は音高く、大鼓の胴を撲つ様に作り。各番毎に一本を備ふ。比纏は昔時豊太閤より拝領の物なりとて、侍二人づつ必ず左右に守護す。

平鳶五十六人は同じ模様神纏に青縞の股引、奮金白紐の脚絆、青縞の足袋に足取り揃へ、茶色に同じ紋所(斧の打違)を染出する皮羽織を着し、髪は半締とて髭は海老の腰の如く刷先を美事に散し、髪を抜上げすき額にす。

何れも背丈は五尺(1.5メートル)以上、面たくましく力飽くまでも強く、腹を突出し左手に頭巾、右手には五尺の鍵を携へ、そも其行列の足並は左手に左足、右手に右足と前後一樣手足揃へて歩む光景、實に一粒撰りの百萬石とは知られたり。

殊更に正月出初の式に梯子の上の曲乗は、敷萬の人を驚かす。流石氣負の四十八組も之には一步を譲りける。斯くて行列の跡よりは更に小者等四五十人にて、梯子・水桶・龍吐水など、夫々の防火器を憚ぎながら、火事場目掛けて繰出す様は賑々しくも又勇まし。」

以上記したように加賀鳶は、各大名お抱えの大名火消の「中間人足」や定火消の「臥煙」、町火消の「鳶」より格式があったことから、このことを自負して、さぞかし鼻息が荒かったのではないかと思われる。



加賀鳶合紋ならびに装束

5 加賀鳶に係わる伝聞

明治40年(1907)加賀鳶の生存者が、加賀火消とはどういうものであったかを、東京消防庁の前身

である、警視庁消防本部が開催した、「消防慰労会」の席上で語ったものが、当時の「日出新聞」に掲載されているので、次にこれを紹介する。

「嘉永時代(1848～1853)に於ける加賀鳶の服装は、享保時代(1716～1735)と大差なきものの如し。年に一枚宛下付せらる・雲龍の着物は、白紺赤の彩色入りにて、華やかなること言語に絶せり。

鳶の面々は遠方の出火には、これを着用して勇ましく繰出し、近庭への出火には刺甲を着て、軽快なる行動を執るに都合よしとなせり。

鳶の総数は六十人を越えざるも、悉く氣質の江戸児にて、月に三步三朱と白米二人扶持の手當を頂きぬ。当時の三步三朱は、白米一石に相当せり。

これら鳶の勤務といへば、平素時々消火の演習をなす外、出火の折を俟つのみにて、他にこれという仕事もなきより。男を費り伊達を磨かんと志す者は、競うて加賀鳶たらんことを望みぬ。

こは他藩には平常何等の手當なきに拘はらず、加賀鳶には年中殆んど徒食に等しけれど、相癒の扶持あること。一は市中を歩行するに、寛潤伊達の雲龍小袖を着し、燻色の皮羽織三ツ四ツに畳んで肩にかけ、悠然として歩む様の、如何には立派に萬衆の視線を一身に集注するより。同じ火消となるなら、加賀鳶に限るといふ念を起さしむる爲めならん。

前田家邸内に鳶の屋敷を設けられ、堅固なる火見櫓には、足軽五・六人詰合して晝夜張番し、出火を認めるや直に半鐘板木を打ち、八町(約 800 メートル)以内を近火として消防に従事し、十町(約 1 キロメートル)以内には八町の境に出張して警固を張り、十五町(約 1.5 キロメートル)以上に及びては、板木のみ打つて鳶は出張せざりしも、火勢猛烈を極め他消防組にて、到底防ぎ止め能はざる

時は、御人数にて防がる・やうにと、幕府役人の依頼に鷹じ、加賀鳶は八町以外何れの地へなりと、銀塗太鼓の纏を打振り、足を揃へて駈付け瞬く間に消し止むるより。

嘉永年間に於ても加賀鳶は、幕府及び町民の信頼を一手に繋ぎ、名望一世を墜せしを知るに足ると。」

と記されている。

6 加賀火消に係わる逸話

前記のように伊達姿で活躍した加賀火消は、火事場での消し口を巡っての喧嘩や、消火活動に関する逸話が数多く残っている。

次は、増上寺の近くで火災が起った時の逸話である。

「増上寺は寛永寺とならぶ、徳川将軍家の菩提寺で、加賀火消は、増上寺の消防も勤めていた。ある時増上寺の近くで火災が発生し、増上寺にも火の粉が雨霰と降りかかって来た。

増上寺の境内には、いくつもの防火用の井戸が設けられていたが、当時増上寺の警護に当たっていた松平加賀守綱利は、"尊い御廟に汚れた井戸水を掛けるのは畏れ多い。幸いわが屋敷(本郷上屋敷)には、清き水が多くある。その水を運んで火を消せ。"と下知した。

そして本郷から芝の増上寺まで、蜿々一里半(6 キロメートル)の間に、数千人の人足を並べ、人海戦術で水を運び消火に当たった。」という話が残っている。

これは加賀火消の威勢のよさを示す、作り話しではないかと思われる。